

印度西北國境の考察

野間 三郎

である。

東洋に於る印度の位置及びその性格といふものは今や次第に變化しつゝあるといはねばならない。そしてその變化が如何様のものであれ、それは生起し消滅する一つの事件にすぎぬのではなくて、繼起するものの性質を大きく變化せしめ或は規定するといふ意味に於て歴史的な意義を負はされねばならぬ。とすれば、東洋の内部に於て西洋と東洋をかけた秤程の支點に股がつてゐる、いはゞこれが今日の印度の運命的な像ではあるまいか。

これは英領のうちにあつて、しかも英領ではない。そのことはこの地方が尙所謂部族領 tribal territory として英國直接の支配下にない地域を含むることにも知れる。いはゞ膨脹期の英國の政策の遺物であるこの地方は、それが完全な消化を受けてしまはぬ前に、既に英領印度の内部的な崩解の機因と化しつゝある様に見えるのである。

西北國境州とはその名の示す如く印度の西北、アフガニスタンと境を接する所である。

ヒンズークシの餘波とスレイマン山脈のなす山岳及丘陵地帯に定められた國境デユラント線からインダス河に至るこの州は、面積凡そ十萬平方料人口五百萬を含むのである。山麓に沿つてこの州は統治區と非統治區の二部に

分たれてゐるが、後者は部族の自治に委ねられ、英國の統治權はそこに置かれた駐在官の手を通じて間接に及ぼされるので部族領と稱されるわけである。

それ等の人々はパタン族 Pathan と呼ばれ、國境を越えた彼方にはアフガン人と呼ばれてゐる同族が尙七百五十萬人程ある。

そのことは更に云へば、アフガンの主要部族パタンがデュラント線によつて東西に分割され、その一半が英領印度に編入されてゐるといふことなのである。この様な所謂小數民族の成立が如何なる意義をもつてゐたのであらうか。そのことには今觸れるのではない。

しかしながら、慄慄を以て聞えるパタン族は、これが困難な征服の對照であつたと同じく今に至るまで困難な統治の對照として残つてゐるのである。

この西北に印度總兵力の八五%が配備されてゐるといふことは何を物語るものであらうか。もとよりそれが對外的な意義に於るものであることは明であるが、それは又内部的な目的をも兼ねゝばならないのである。ミニチニ

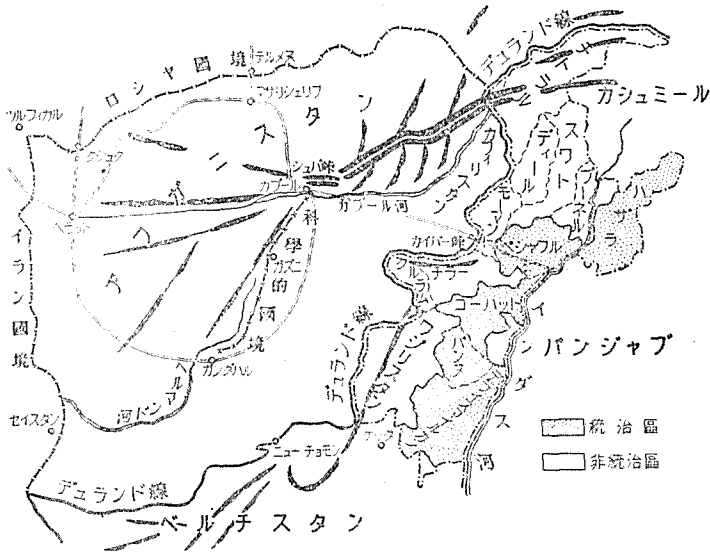
Mutiny と特に呼ばれる一八九七年の大擾亂をはじめとしてこゝには絶えざる叛亂と騷擾がある。地球上に廣く領土をもつ英國がこゝに始めて國境問題を身に感じたといはれるのも一つにはこれによるものである。

パタン族の蜂起と襲撃は殆ど常に勝利の遁走を以て終る、その出動も退却も居住民の内部に味方をもつことによつて行はれるからである。逃走する者を陰匿し、食糧を給與し、掠奪物品に仕末をつけるのも全て内通者があらるのである。

この爲にたとへ襲撃が往々英國士官に向けられるのであつても、これを豫知することも又効果ある反撃を以て報いることも出来ない。この様な有様は領有當初のものではあらうが今日と雖も尙著しい變化を見ないのであらう。繰返し起る暴動がこのことを證してゐる。暴動の反覆は一つにはこの潜入への好條件にかゝつてゐることが見逃せないのである。

しかし又地勢が彼等の行動を容易ならしめてゐるのであるし、彼等をしてかゝる生活手段に出でしめる經濟

的な根據も考へ難いことではなす。(The Cambridge



一第圖挿
ンタスニガファと州境國北西

history of India. v. 6. p. 460)。

礮角の山地に住む人間が肥沃な平原にその生命を維持すべきものを求めようとするのはいはゞ自然であらう。

この自然性が繰返される掠奪の執拗さを生むのである。騷擾によつて最も激しい不安を印度政府に與へたワヂリスタン Waziristan を例にとつて見よう。

礮角不毛、河床には水がない、耕地は僅に流れのある谿谷に帯の如く見られるに過ぎない、かくの如きが彼等の住む山地の一般的状态である。しかるに眼下にはデラヤット Derajat の平原が横はり、南にはポヴィンダ Powindah の隊商路が中央アジアからガズニ Ghazni を經て印度の平原に遙々と通じてゐるのである。

その上常に移動することによつて生存を續け得る遊牧人にとつて、固定した境界といふ觀念は元來左程身に沁みこんだものではあり得まい。パタン族の不拘束と掠奪はかゝる自然的根據に立つてゐるのである。

然したとへかくの如き環境にあるとはいへ襲撃や叛亂は決して平常の姿ではない。冬期に於ける彼等の出稼ぎ

や畜群を従へての移動はその平和の姿を傳へるのである。ペシヤウル族 Bajauris やスワット族 Swatis はペシヤウル Peshawar の村落に來り、オラクザ族 Orakzais はコーハット Kohat やジナルラム Jurrum に來りて、耕作を助け道路を築き或は都市勞働に従ふ。アフリド族 Afridis はチラー Tirah の山中から畜群を追つてペシヤウルのカージェリ Khajuri 平野に移り來り、ワヂル族 Waziris はバンヌ Bannu 或はトチ Tochi に、又ピターニ族 Bhitannis はデラ・イスマイル・カンの地方に遊牧するのじき¹⁰。(W. Barton; India's Northwest frontier. Lond. 1939. p. 20.)

彼等の生活はこの様にして飽迄も平原に依存せざるを得ない。むしろこの爲に印度政府は入國と歸國を隨時に堰き止め得るといふことによつて彼等を制御する鍵を握むのであるのもある。

しかりとすれば彼等を支配する經濟的事情も、その國境に對する觀念も、共に叛亂や騷擾に對する充分なる説明を與へるものではない。それは彼等の移動を説明する

けれども、それが平和的な出稼ぎの形態から、闖入掠奪の騷擾への變化を明らかにすることが出来ないのである。

もしなほこの西北國境の不安定の根源を自然に求め様とする傾がありとするならば、それは明に統治者の側の一つの努力だとされなければならぬ。人種的なそして政治的な矛盾が、むしろこの西北に於る不安定と、従つて又この國境の構造の眞實へ導いて行くものである。

二

デネランド線 Durand line と呼ばれてゐる現行西北國境はその不合理を指摘されることによつて絶えず問題となつてゐる。それは時代を異にするにつれ、その強調される所とその色彩を異にするのであるが、その論難が殆ど全て英國人によつてなされて來たことは一つの顯著な事實である。こゝに疑ひなく一つの問題が存してゐる。英國人自身の非難であるといふことは、この問題「不合理性」への糾明としてではなく、英領印度の發展乃至は防衛といふ立場からする「不充分さ」への抗議として

展開せしめた。従つて我々はこの問題の展開を進ぶことのうち、英國の中亞に於る勢力の消長につれて變化するこの國境の意義と同時に、亦國境といふものゝ本質について省察する機會を得るだらうと思ふのである。

アフガニスタンと西北國境州を分つデュランド線は防禦線としての價値を有してゐないこと、これが抗議の一つの中心である。

その北半、即ちモーマンド地方以北ヒンヅークシに至る間に於ては、この國境線はほぼ分水嶺を辿るものであつて、一應非難を免れることが出来るが、問題となるのはモーマンドより南ゴマルの間である。

ゴマルを發して北ワザリスタンに至る間に於るこの國境線が軍事的な考慮を示してゐないことは餘りに甚だし、それは唯この線の向側にアフガニスタンの勢力が始まると假定する線が存在するに過ぎないとさへ言はれない。

ワザリスタンはコースト河 Khost とゴマル河に挟まれた一つの瑞西であり、その中央をトチ河 Tochi が横

斷してゐるのであるが、こゝには有效な軍事的行動を起すべき基地が存しない。

更に北すれば、クラム河とカブール河が形成する峠（ミルザカイ、パイワル、カイベル）に出るのであるが、此等を防禦するベイワルとルンデ・コタル Lundi Kotals の城砦はその間を走るスフェドコー Sufed Koh 山脈によつてその連絡を斷たれてゐるのである。この様にしてこのクラム河とカブール河に挟まれたチラーの地方はむしろアフガニスタンの勢力の浸潤に對してその懷を開けてゐるといへるであらう。

更に又カブール河の北モーマンド地方は、デュランド線の二分する所となつて、その部落は國境を横斷して存してゐる。これも亦明白に不都合でなければならぬ。かくの如くしてワデル、アフリド、モーマンドの諸部族が國境に於る問題發生の中心となつてきたのである。

(Holdich; Political frontiers and boundary making. Lond. 1916. p. 276-78)

この國境線が左程美事に出来上つてゐないことにつ

て我々は今一つ例をあげてをかう。

ペシヤワルとコーハットはジョワキ獨立國（アフリド部族）の鳥狀突出によつて分離されてゐる。これはシツク族の手からこの地方を奪取した英國が、その出駄羅目な國境をそのまま踏襲してゐる有名な例である。

(The Cambridge history of India V. 6, p. 458)



つて自らの主張と機能とを有してゐたに違ひないと考へられるのである。

顧るに、一八四九年英國が五河地方をシツクの手より取上げること成功すると共に（第二シツク戦役）この國境地方は同時に英國の統治を受けることになつた。こゝにこの西北國境の統治が英領印度の一問題となり始めるのである。もと／＼人種言語歴史その他慣習を始めとし

て地理的條件をも大いに異にするこの地方に、他地方と同一の統治を布かんとするところに大いなる無理が存した。一八四九年よりアフガン戦役の一八八〇年に至るまでの間に於る大小四十の叛亂はこれに報いるものであつたのである。

パタン族は嘗つて他の支配を受けたことがなかつた。

従前はアフガンのエミルに服してゐたとはいへ、いはゞ獨立を保つてゐたのであつた。今や彼等は罪人の逃亡を匿ひ、英領に出撃し、陰謀と恐喝、強盜と殺人が白晝に横行して、しかもこの所謂部族領と英印との公式の關係は唯僅に統治區の首長を通じて行はれ得たのである。英國官吏はこの部族領に入ることを得ず、しかもこの獨立地區の住民達は自由に英領内に入出し得たのである。かくの如くしてパンジヤブ統治の初期は英國の金き守勢であり、次第に懷柔へ進むといふ、いはゞ忍耐を唯一の政策とせねばならなかつた。パンジヤブ總監、後の印度太守ローレンス Sir John Lawrence の名に因んでローレンス派と稱せられるこの不干渉主義、「巧妙なる靜觀」の方

法は、しかしながらやがてリットン卿の着任（一八七六年）によつて打切られる。アフガン問題への不干渉主義は今やむしろ國境線をアフガン内部に向つて前進せしめんとする「前進政策」に變ぜられるのである。

一八七八年の第二アフガン戦役はかくして勃發すると共に、アフガン領の軍事占領は國境をいづこに定むべきかといふ問題を生ぜしめるに至つた。

こゝに於て印度防衛の戰略論はこの問題に關して前進派と靜止派の二陣營に分れ、その最も有利と信ずる防禦線を主張して相譲らなかつた。(i) イングス河、(ii) 昔時のシツク線(これはほど現在の統治區の境界、所謂行政境界に相當する)、(iii) デュランド線、(iv) 「科學的國境線」(カンダハルを結ぶ線)の四つがその主要なるものである。

最も強硬な前進主義であり、且つ最も有利な防禦線である。この第四の「科學的國境線」が何故デュランド線に席を譲つたかといふことは多くの問題を含む所であらう。しかし此を決定したのは戰略家ではなくてむしろ外交家であつた。頻々たるロシア南下の警報は前進派と靜止派

をして握手せしめずはやまなかつたのである。

かくして一八九三年モーチマ・デュランド Sir Mortimer Durand がアフガン王アブドル・ラーマンと交した協定に従つて兩者の國境が劃される。デュランド線と呼ばれるのはこの爲である

この國境線の不安定さと、そして特にそれが地理的な條件を缺いてゐることは既に冒頭に述べた所であつた。

何故この様な騷擾と暴動、ひいては英領印度の不安を招來した不満足な國境を定めたのであらうか。當事者はこの國境の重大な地理的缺陷を見逃してゐたのであらうか。

國境といふものは山脈或は河川と一致することが多い。この様な地理的條件の優越がやがて國境を地理的觀念として觀念する慣習を生ずるに至る。我々の疑問もこゝに根據をもつてゐるに他ならない。しかし國境は本來政治的なものでしかなかつた。「科學的國境線」がデュランド線にその席を譲つた理由もこゝにのみ求め得るのである。

譲つてアフガンを挟む英露の關係に眼を轉じよう。

一八八六年には露阿國境が夫々ラムスデン Lumsden ツェレノイ Zelenoi を代表とする英露委員によつて劃定された。デユランド協定に於る印阿國境の劃定（一八九三）はこの次に來る。又パミールに於る紛議も一八九五年英露の協商となり、次で一九〇一年に西北國境州がパシヤブから分離設定されることになつたのである。

つゞく英阿の協商（一九〇五）はアフガンに於る英國勢力を確立し、一九〇七年の英露協商は此を英國の保護國と定むるに至つたのである。

この間に於るアフガニスタンはその混沌たる國狀が僅に英露二國の壓力によつて定形を與へられたといふ有様であつた、支配力の薄弱と分裂的諸勢力の割據、頻繁な叛亂と目まぐるしい君主の交替は唯緩衝國としてのみ國家の形態を保たしめたのである。

一體緩衝國といふものはこれを挟む二國の保證の内に成立つのであらうが、保證する二國の間に力の相違が甚しければそれはやがて一國による保證の下に存立すること

となり、所謂保護國と化さねばならない。

實際アフガニスタンはかゝる経過をとつて英國の保護國となつたのであるが、デユランド協定は既にかゝる豫想の下に成立したのであること明に考へられるところがある。

しかりとすればデユランド線の地理的資格といふが如きは第二義であり、既に前年英露の劃定する所となつたアフガン北境の防塞性を英國にとつて眞剣な問題であつたのではないか。

ヒンズークシに始まる高峻な山嶽はバダクシヤン Badakshan となりベンデ・トルケスタン Band-i-Turkistan となり、たとへオクサス河に防塞としての價値なしとするも、殆ど完全に露西亞の勢力を遮斷してゐると云ふことが出来る。この防塞を横切るものとしては先づロシアの前哨クシュク Kushuk よりヘラツトに通ずる道が存するのみである。ヒンズークシの脈が一時切斷されるこの高原は礫地ではあるが、通常稱へられる如く沙漠ではない。土人の呼んで「ダツシユト」dashit とすること

の地形が、誇張されて沙漠 desert とされてゐるとすれば、これはアフガニスタンの弱點を糊塗せんとするものだと考へる他はない。しかしながら主としてこの所に於てのみ南北への通路が存し得るといふことは要するにアフガン北境の防塞性を證するものである。

遙か北方、即ちアフガニスタンの露西亞側に、國境として此を一概に言へば非常に良好な満足すべきものを我々は達成するを得た。それは一點非難の餘地を止めぬといふことを得ないが、殆ど全線にわたつて、これを越ゆる者は自らが國境を越えつゝあることを自覺せざるを得ぬ底のものである。そしてこれはロシアの側からアフガン領内に潜入することによつて起される紛糾に對して自然的な且つ決定的な限界となつてゐるのである。このことは何といつても動かすべからざる好都合だと思はれるのである。中略

これを作り上げるに要した犠牲が如何に大であつたにせよ、我々の努力と出費は充分償はれてゐるのである。

とシムホルデイツチの言葉も (T. H. Holdich: The Indian borderland, 1901, p. 366-67) 明にアフガン北境の設定が偶然のものでないことを語つてゐる。

このアフガン北境は先述した如く一八八四年のアフガン國境劃定委員會によつて定められ、更に一八九五年の英露協商によつて完成せられた。

しからは第二アフガン戰役(一八七八―七九)の間に論争の端を發した前進派と靜止派の論争は「科學的國境」の有利なる防塞線を棄て、現行國境たるデユランド線(一八九三)へと後退したのではなくてむしろ前進したと考へられるのである。何故ならばアフガン北境は印度北境であるとの考によつてこそ、この印阿國境は劃定されたのであるから。

三

國境は人種を分つものでなければならぬ、といふ考は一般に認容される。唯國境は單に人種的な意義にのみ立脚するものでないといふことは自ら別である。しか

しながら國境なるものが成立するに至つた過程を少し思ひ浮べてみるだけでもそれが人種的(従つて又文化的)境界と合致するといふことの自然さが想到される。その自然さの内にこの要素の力強さがあるのである。

殊に大戦後正義にまで展開されたこの要素がデュランド協定に於て無視されてゐることは少しく注目するに足る。それがこの國境の性格を探究するのに手がかりを與へると思はれるのである。

デュランド線はパタン族を分つて印阿兩側に略々相半せしめることになつた。國境州に於けるスワット、アフリド、モーマンド、ワデルは何れもこのパタンに屬するのである。

パタンとはアフガン人の意であつて、それはデュラニ Durani などと共にアフガンを構成する有力な種族である。唯彼等が獨立を好んで敢て他の統治に服さなかつたことは、アフガンのエミールがこの地方一帯に勢力を有してゐた時代も渝らなかつた。そこに彼等はあたかもアフガン人でないかの如き取扱を受ける基があつたのであ

る。

しかしながら、それが爲に彼等のアフガン人たることを否定するわけにはゆかない。エミールの支配にこそ服さぬとしても、エミールへのつながりの情の存することは元より著しい。外國に對する政治的態度をエミールと共にするといふことはいはゞ彼等の獨立性とは關係がない。さればこそあれ程屢々生じた叛亂もエミールを通じてのみ理解され得るのである。

このデュランド協定はアフガンからパタンを切離したに止らず更にパタン族を二分することになつた。さればこゝには二重の意味に於ける小數民族が出現したのである。

この様に不安定の原因となる獨立種族を國境線の内部に持つこと、殊に國境線が彼等の住地を二分することは印度にとつて不利益ならずとしない。デュランド線の國境としての價值を論難するものが地理的な側面から同時にこの人種的な側面を取上げたであらうことは容易に察し得る所である。

丁度一八九三年デユランドがカプールに赴く直前英國にアフガンとの國境を明にせんとする意志のあることが洩れたのでアフガン王はワヂリスタン及びゾーブ Zhob 地方に騷擾を起してデユランドの使命に對して一つの示威を試みた。その時エミルより印度副王に於てた警告がある。

(Aba-ur-rahman, Autobiography, II, 158.)
(*cit. from Cambridge history, v. 6, p. 462.*)

かの地方を我がアフガン領より割取せんと欲するならば、それはお互にとつて無益のことである。閣下は常に戦争か又は紛議に煩はされねばならないであらうし、しかも彼等は絶えず掠奪を續けるであらう。貴國政府が強力にして平和時にある間は、閣下は彼等を強壓によつて鎮靜ならしめ得るであらう。然しながら一度外敵が印度國境に姿を現はすや、この國境地方種族は閣下の最も恐るべき敵と化するであらう。中略

閣下が余と國籍と宗教を同じくするこの國境種族を余が手から割取することは、余が權威を臣民の眼前にて傷け、余が力を弱めるであらう。しかも余が力を弱めることは貴國政府の爲にとらざる所である。

エミルのこの警告は最もよくこの國境民の性格を語つてをり、そこに單なる脅迫の爲の誇張の存せぬことは、國境種族の鎮定に手を焼いた印度政府が最も明に知つてゐたに相違ないのである。

しかるに、例へばホルディッチがデユランド線を論じ (Political frontiers & boundary)
(*making, p. 276-77*)

それは全體として此を云へば便宜的な線であるが、人種的な條件には慎重な考慮を施して、ベルッフ Baluch とアフガンを分ち、又アフガンと國境種族を分つてゐる。此のものはアフガンと多くのつながりを有してはゐるが、決してアフガンの(或は他の)支配に服したことはないのである。

と、云つてゐる如き、この真相に對して故意に目を覆はんとするものと云へる。

英國は自らのこの不自然な民族の分割を蔽ふ爲に、デユラニ及其の親縁種族のみを純粹アフガン人としバクタン族を印度系の種族とするの説を採用するを有利とした。その爲にペレウの著書が (Pelew, H. W. The races of
(Afghanistan, Calcutta, 1880) 權

威として登場したわけである。

そして又印度領内に入つたものをパタンと呼ぶことを続けながら、アフガン領内に残るそれをアフガンと好んで稱したことも又英國がデュランド線の人種的合理性を不知不測の間に實證せんとした形跡だと考へられるであらう。

いづれにせよ、後に英領印度の不安の原因となり、當時迄にも既にその統治に辛き目を見てゐながら、この異種族たるパタンをアフガンから印度に編入したことは、そこに追求さるべき問題の存することを示してゐるであらう。

このことについてはマクドネルの次の如き記述が我々にその考察の手がかりを與へる。(Maddonell, Colonel A. military geography, 1911, p. 115) (C.: The outlines of

カファイルを除いて、彼等^{バタ}は^ン族 全てはエミールを彼等の争論の仲裁者とし、軍事的冒險の相談役とし、難澁したときの援助者及庇護者とし、宗教問題に關する精神上の顧問としてゐる。

しかしあらゆる單なる同情的紐帶といふものはあつても、エミールが彼等の間の事件に干渉しその獨立を脅し、そして英國の統治區の境界までアフガンの有力な支配を及ぼすことを妨げるものではない。

それ故に、デュランド協定は、アフガンと戦争を起すことなくして我々がこの自主的種族を處理する爲には是非必要な豫備行動であつたのである。

英國は實にパタンをアミールと切離すことによつて此を征服懐柔せんとしたのである。同じく好戦のパタン族の掠奪を受けるならば、むしろ國境を押し進めて彼等を自領内の民となして此に強壓を加へ得るの便なるを取つたのであらう。もし此に成功するならばそのことは唯に印度領内のパタンの懐柔に止らず、同時にアフガン領内のパタン懐柔の結果を來すこととなる筈である。

この目算はその後の推移より稍々その見當を失つてゐたと考へ得る節もあるのであるが、彼等にはその確信が存したと思はれる。

ホルデイマッテ (Polit. front. & boundary) はタマンタ Quetta making, p. 274.

がパタン族の背後への逃路にあたり、その占領が印度にとつて偉大な價値を有することを述べて後

國境軍事政策に於てはよく理解されてゐることだが、一般に背後を押へられた東洋人といふものは決して扱ひ難い人間ではないといふことが云へよう。

と述べてゐる。

此等より見れば、この言表の態度に我々が一種不快を禁じ得ないものもあるのは扱置き、ケツタ、カイバル、ワナ等に英國の前進駐屯を行ふことによつて、パタン族は自由に處理し得ると考へたのであらう。

しかのみならず、英國士官に指揮されたパタン族はアジアに於て最も強力な軍隊を形成するであらうといふことも亦一つの楽しい期待であつたのである。

扱この地方の統治は、一八七八年第二アフガン戰役中カイバルに special officer を置いたのを始めとして、やがてシツク征服後には駐在官 Political agency によつて行はれることになつた。クルラムには一八九二年、マラカンド、トテ、ワナには夫々一八九五—九六年中に

その設置があつた。それが現在の如き國境州として誕生を見たのは一九〇一年であるが、これはカーゾン卿の國境政策の完成として印度統治史に記されるものである。

一八九九年カーゾン卿が印度副王となるに及ぶや、土人の叛亂に對する遠征強壓と徒らなる要塞構築と軍備の増強の政策は一轉せしめられた。彼は土人の統治を益々困難ならしめ、叛亂を愈々根深いものにする此等の強壓策に代へるに、退却主義と義勇軍制を以てしたのである。それは前進據點からの後退と、この地方の守備に土人を起用することであつて、一見その不干渉主義は Forward policy から往年の close border system への後退と思はれるのである。

しかしながら英國のデュラント線採擇が先述の如き處にその根據をもつてゐたのであるならば、それは詮ずる所修正された前進主義に他ならず、西北國境州は全く軍事的設計の下に誕生したと考へられるのである。

四

最後に我々は嘗つて戦はされた「科學的國境線」論争といふものに簡単な理解を試みよう。

西北國境に於ける印度の防禦線としては次の四つが主として考へられる。

(一) イングス線、(二) シツク線、(三) デュランド線、(四) 科學的國境線

この四つが論争に登場した前進派と静止派の主要な代表であつたのである。

イングス線の主唱者はローレンス Lord Lawrenceであつたが、それは人種的な合理性を有してゐるとしても防禦線としての價値は殆ど存しないといへる。

それは前進する敵を深く引入れてイングス河谷に於て雌雄を決せんとするのはあらうが、屢々云はれる如く戰略としては到底成立し得べからざるものである。

(Cambridge History,
v. 6, p. 457.)

河川といふものは左程防禦線としての價値があるわけではないし、殊にイングス河の如く左岸の印度側の方が低い場合に於て此は論外であらう。

しかも防禦線をこゝに定めることはアフガンを敵手にゆだねることを意味するに他ならず、更にこのことが印度民衆に與へる影響を考へるならば此の線は到底支持することを得ないわけであらう。

デュランド線の缺陷は既に述べる所もあつたが、カバルを始めとする峠の内部に止つてゐる限りアフガンを敵手に委ねればならぬことに塗りはなない。デュランド線の更に内側に、今の統治區の境界と略々一致するシツクの防禦價値はこの點よりすればデュランド線以上にその價値を有しないことになる。

ヒンヅークシ山脈とスレイマン山脈よりなる印度國境地帯には多くの峠が存する。此を北より數ふれば、カルゴダ Kharigohā、シヤウイタク Shawiakh、スノギル Banoghil、タルコット Darkhot、カチンゼ Khatinza、アグラム Agram、ドラム Doran、トングル Mandar、カホチ Kohoti、ロワリ Lowari、カイズル Khaibar、ローハット Kohat、ハイワル Paiwar、ミルザカイ Mirzakar、ロタンニ Kotanni、ローシヤック Khojak、ボラン Bolan 等。

ある。此等の内カイベル以北のものは地勢の峻険と積雪の爲殆ど軍事的に重大な意義を有せぬと認められよう。カイベル、ボラン等の重要な峠はそのアフガン側への出口をも英領内に確保してゐるのであるから、デラランド線は防禦のみからすれば一應首肯し得る價值はあるのであるが、そこに止る限りアフガンを放棄せねばならぬことゝ、内部にパタン族を有してゐることが何としても重大な缺陷とならざるを得ない。

パタン族は唯に回教徒として今日の印度問題に於て深い省察を要求するに止らず、好戰的な戰士として、亦直接印度の防衛力に對する吟味の一焦點ともなりつゝあるのである。

サンデマン Sandeman のバルチスタン統治の經驗は邊境に於ける平和維持の方策として土着民義勇軍の編成を一つの傳統たらしめた。しかしながら英國の辛い經驗は土民への不信となり、土民軍に一つの結合力を賦與することを避けしめた。こゝに於て軍の單位を階級と宗教の別に從つて編成混合するといふ一つの *divide et imp*

ear の方法が、一八五九年ピール委員會に於て決定された。この *Class company* と呼ばれる軍隊の構成はその後幾多の修正を経たけれども、尙その原則は一つの基礎として残つてゐる。(Bhata: *Britische Wehpolitik in Indien*, in: *Geopolitik*, 1940, S. 137)

この様な方策が時代の變遷と共にその意義を變へて來つゝあることは容易に理解されるところである。一度印度に於ける戰鬪力の増大が要求せられる時期が到來するやそれは一つの阻止的效果を示すに至るであらう。これは今日に於ける印度の内面的矛盾の一つのあらはれに過ぎない。この國防力の内面的矛盾を前にしてパタン族の好戰性は單なる好奇譚から再び現實的な關心の對稱へと立歸りつゝあるのである。

所謂科學的國境線といふものはカプール、ガズニ、カングダルを連ねる一線である。この三地點の戰略的價值は全くその道路網の配置に依存してゐる。中央にヒンズークシとハザラの山脈を有してゐるこのアフガンに於てはヘラットから印度に至る道は極めて限定されたものとならざるを得ない。この中央の山脈の南縁を走る大道は

ヘラットよりカンダハルを通る。ポラン峠へ出る道は此である。マサリ・シエリフ Masari-Scherif を通る道はシバ峠 Shiba を越してカブールに出るし、又ヘラットのハリ・ルド河 Hari Rud によつてヒンズークシを越える道はカブールか或はガズニをよぎらざるを得ぬ。カイベル、パイワル或はコタンニの諸峠に出る道が此より分岐する。

故にカブール、ガズニ、カンダハルの三點は北方より來る印度への進撃路の考へ得る全ての道を扼する。要害を以て鳴るこの三點を押へるものがこの方面に於ける争鬪の覇を握るのである。

しかるに、印度より進出してこの三點を確保する爲には、英國にとつて積極的な政策の背景を必要とせねばならないし、千八百年代と今日の情勢の相違はこの方面を印度及び英國の唯一の國境たらしめない。こゝに再び「科學的國境線」が興味ある觀察の對稱となつて甦る機因が存するのである。

いづれにせよ西北國境州並にデュランド線は英國の最

も心血を注いだ「唯一」の國境として誕生し、その膨脹期の政策の遺物として存してゐる。パタン族を通じて露出される可能性を潜めたその矛盾が如何にして印度自身の矛盾とつながるであらうか。こゝに介在するものとしてアフガンの向背と印度回教徒の動向が自ら重大な意義を負ひ來りつゝあるのである。